

## エリザベス・ピーボディと幼稚園



津 守 眞

「此の頃、エリザベスは何か思いに悩んでいる。若い時から本当にやりたいと思っていたことが、結局此の年になっても果せなかったことを考えているようだ。今までにやらなかったことで、自分自身にとっても、友達にとっても満足のないような何ごとかをやりたい、と彼女は思っているらしい。」これは、エリザベス・ピーボディの妹メアリー即ち、ホラス・マン夫人が、姉エリザベスについて、丁度エリザベスがそれまで盛にやっていたボストンのウェストストリートの本屋を閉鎖した頃の日記の中に書いた一節である。エリザベス・ピーボディは、アメリカにおける幼稚園の創設者として、日本でもかなり知られているが、ピーボディ女史自身については、書かれたものは少ないようである。最近、どういふ積極的な理由があつてか知らないが、「セイラムのピーボディ姉妹」という題で、ピーボディ姉妹の日記や手紙などを集めて伝記を綴つた書物がアメリカで出版されている。三百七十頁に至る大部の書物である。幼稚園の創始者として以外の、ピーボディ女史が詳しく描かれていて極めて興味深い。此の他、幾つか私が手にする事の出来た書物を併せて、エリザベス・ピーボディが幼稚園運動に乗り出す前に、彼女の心の中に動いていたものを探り出して、ここに簡単に紹介してみよう。

エリザベス・ピーボディは一八〇四年五月十六日にマサチ

ユセツト州のビレリカで生れた。そして死んだのが、一八九四年一月三日であるから、正に千八百年代のアメリカを、始めから終りまで生き抜いたわけである。そののみならず、精力的で才媛のエリザベスは、アメリカでも文化を誇るポストンにあって、当代の最高の文化人達と深く交わり、十九世紀のアメリカの文化を形作るのに蔭の貢献をなして来たという意味でも、十九世紀のアメリカを生き抜いた人である。十九世紀の有名なアメリカの文化人達の極めて多くが、多かれ少なかれビーボディ女史と交際し、彼女から影響を受けている。これが、一九五〇年になってまで、ビーボディ女史の日記や手紙が整理されて書物にされる理由であろうかとも思われる。以下少しく年代を追って彼女の生涯を眺めてみよう。

エリザベス・パーマー・ビーボディ (Elizabeth Palmer Peabody) の父親は、余り有能でない、齒医者だ。た。母親は、結婚する前から小学校の教師をしており、結婚後も引き続いて家庭で子供達を集めて学校を開いていた。此の学校でビーボディの有名な三姉妹は成長した。即ち、後のエリザベス・ビーボディ女史、ホラス・マン夫人及びナタニエル・ヒンソン夫人である。

エリザベスは生れながらに教えることに秀でていた。そして十六才の時には、早くも母親の学校で教え始めた。十八才の時に、エッセイストとして知られている。ラルフ・ウォル

ドー・エマーソンからギリシャ語の手ほどきを受けた。その時、エマーソンはまだ十九才の青年であった。エリザベスのすぐれた語学力に、エマーソンは驚嘆し、数ヶ月にしてもはや私には何も教えることはなくなった。と云って、教授を放棄したといわれる。しかし彼らの間の友情は、それから晩年に至るまで続けられた。二十一才の時に、エリザベスは、妹のメアリー、後のホラス・マン夫人と共に、ポストンの郊外の女子の学校の先生となった。彼女の先生ぶりがどんなものだったか、又彼女らの育った母親の学校でどのような教育が行なわれていたかを知る具体的な材料はないのであるが、エリザベスはその教育方法を母親から受けつぎ、それは当時にありがちな強制的方法ではなく、むしろ紳士的な礼儀正しい雰囲気を作ることを通して行なわれたと云われる。エリザベスは日中教えて、夜は附近の牧師、ウィリアム・ユレリー・チャニング博士 (William Ebery Channing) の助手として働いた。彼は心の寛い人物であり、むしろ自由な神学的解釈をする人であり、著書も幾つかある。若いエリザベスは彼に傾倒し、特に、型にはまらない自由な批判をすることにおいて、彼から多くの影響を受けた。そしてエリザベスの晩年になって彼が死ぬまで、友情は続いた。一八二八年、エリザベスは、アメリカ教育協会 (National Education Association) の初期の指導者の一人であり、アメリカ教育雑誌 (

American Journal of Education)の主筆である。ウイリアム・ラッセル (William Russel) の経営する学校の教師となった。此の仕事の給料によって彼女は両親や妹の生活を支えることが出来たので、全家族はエリザベスに頼ってボストンに移って来た。此の時代以来、エリザベスの家族を支える生活が始まった。丁度此の時代に、ピーボディの姉妹は、後の偉大な教育学者であるホラス・マンと識り合い、ホラス・マンは秀でた才媛の姉妹の家に毎日のように足を運んで、彼女らと何時間も議論を戦わしたのである。エリザベスが精力的で頭がきれ、交際家であるのに対し、次女のメアリーは引込思案のおとなしい性質で、議論はどちらかと云えば、エリザベスに独占され勝ちであった。メアリーはいつも傍で耳を傾けていた。末の妹のソフィアは絵を好み、芸術的な感覚の持ち主であった。それからずと後になって、メアリーがホラス・マン夫人となるのであるが、此の期間のピーボディ家の居間は若い人々の集会所で誠に興味深い。

一八三六年、エリザベスは、前述の学校をやめて、テンブルスクールという学校で教えることになった。此の学校はブロンズン・オルコット (Amos Bronson Alcott) によって設立されたものであり、エリザベスは一八三〇年以来、彼の進歩主義教育に感銘を受けていた。ブロンズン・オルコットは、有名な「若草物語」などの少女小説で知られている。ル

イーザ・オルコットの父であり、こういう関係で、エリザベスはルイーザの小さい頃からよく知って親しくしていた。テンブルスクールに移ったエリザベスは、しかし乍ら、直にオルコットのやり方に耐えられなくなった。オルコットは小心で臆病で、いつも一般に認められている考えから外れることを恐れていた。エリザベスにはその小心さが耐えられず、オルコットも、エリザベスの自由な大胆な意見が耐えられなかった。「人は少なくとも神の霊の一部を受けついで生れているということを信じていることが出来ないで、ただ人の心の罪のみ煩つている、小さな学者ぶつたオルコット」に、エリザベスは耐えることが出来なかつた。自ら述懐している。エリザベスは間もなく此の学校を辞した。しかしながら、此処でも亦、エリザベスはオルコットと生涯友情を続けるのである。

一八四〇年に、エリザベスは、ボストンに本屋を開いた。これはウェストストリート・ブックショップと呼ばれて、当時のボストンの文化人が寄り集まって議論や談話に花を咲かせる社交場となったのである。勿論、エリザベスは此処の女主人公であり、議論の接穂をする役目であった。此処に集まった人々は当時のボストンに寄る殆どあらゆる文化人、即ち当時のアメリカの文化人を網羅していた。自然詩人、ソロー (Henry David Thoreau) キーレン (Ralph Waldo Em-

erson) オルロット、ホラス・マン、ホーンン (Nathaniel Hawthorne) 作家であり外交官であるローウエル (James Russell Lowell) 宗教家であり社会改革者であるパーカー (Theodore Parker) リブナー (George Ripley) 等々が絶えず出入し、哲学を論じ、芸術、詩を語り教育論を戦かわした。此等の人々について百科辞典でも見て頂けば、ピーボディ女史の教養を推察することが出来よう。此の本屋は十年間続くのであるが、その間に、次の妹がホラス・マン夫人となり、末の妹がナタニユル・ホーンン夫人となって、エリザベスは一人残されるのである。当時の彼女は、かのコンコード学派の一人であった。そして時は折しも南北戦争の直前であり、エリザベスは奴隷制度反対運動に深い同情を示していた。当時書かれたものの中には、人種問題に対して示された関心が種々あらわれている。彼女は又アメリカインディアン教育の必要を説いた。それから又婦人参政権運動の先駆者でもあった。彼女の精力的な興味の方向がうかがい知れるであろう。しかし、彼女がこれらの興味への熱意をあらわな運動に示さなかったのは、彼女が支へなければならぬ家族のことを慮かってであつたといわれる。

エリザベスがウェストストリートの本屋を閉鎖した時に彼女は四十六才であつた。そして精力的な彼女はその晩年においてなすに値する何ものかを求めていた。「今までにやらな

かつたことで、自分自身にとつても、友達にとつても満足のかつたような何ごとかをやりたい、と彼女は思っているらしい。」と妹のメアリーが書いたが、ここでエリザベスの心の琴線にびんとふれたものが幼稚園運動だつたのである。本屋を閉じてから彼女が最初の幼稚園を一八六〇年に開くまでに十年の年月を経過している。此の間に彼女がフレイベルの幼稚園のことに付いて得た知識はごく僅かなものだった。一つは、これより少し前からウィスコンシン州のウオータータウンで自分の子供のためにドイツ語で幼稚園を開いていたカール・シュルツ夫人を知つたことであつた。一つは、時の文部大臣、ヘンリー・バーナード博士がロンドンの国際教育制度及び材料展示会に出席した際のフレイベルの幼稚園についての二頁ばかりの短かい報告であつた。もう一つは、クリスチヤン・ユグサミナー誌上にあらわれた幼稚園に関する最初の論説である。今これらの一つ一つについて解説するだけの紙数がない。しかし、たゞそれだけの幼稚園の知識が、何故エリザベス・ピーボディの心を揺り動かす力を持つたのであろうか。それは彼女の豊富な常識と経験によつて培かれた人間性に、幼稚園の原理が訴える所があつたことを見なければならぬだろう。一度び幼稚園教育の啓蒙と普及とに乗り出した後の彼女の活動ぶりは正に凄まじいものであつた。全国各地に遊説行脚して幼児教育の必要を説き(19頁に続く)

愛がり、深い愛情を注いでいることには感銘いたします。育てる方法のちがいがこそあれ、日本の子供が善良な信頼すべき人になることは信じて疑いません。

以上一貫していることは、日本の人は皆ほんとに親切なあなたかい心の持ち主だということです。

外国人の書いた下手な駄文をおよみ下さって有難うございました。

終りにのぞみこの記事を誌上にのせる、光栄と名誉をお与え下さった、お茶の水女子大学の津守先生と出版社の方々に厚く御礼申し上げます。

——(言葉使い原文のまま)——

### 筆者略歴

ドクトル・ロバート・H・ブラウワー

一九二三年ボストンに生れ、一九四四年ハーバード大学卒業(仏文学を専攻)ミシガン大学にて軍の日語学校に入り、ニューギニヤ、フィリッピンを経、第八軍クルーガー大将の通訳として京都に七ヶ月をおくる。一九五一年ミネソタ大学の日本語講師となる。一九五二年ミシガン大学にて学位を得、其の間二度、イギリス、イタリヤ、マランス、ドイツ、オランダ等に遊ぶ。

### 51頁より続く

フレイベル主義幼稚園を語り、会う人毎に幼稚園の他は何も話さなかった。人々は最初はただ笑って扱っていたが、会話が終る時には、金を寄附するか、労力を奉仕するか、或いはその両方を与えることを約束していた。今や老ビーボディ女史は、どこに出かけるにも寝巻の上から洋服を着て、その両方のポケットは洗面道具でふくれ上っていた。どこに出るにもそれが彼女の旅行準備だった。ヴァン・ウィックは、ボストン名物のビーボディの姿を次のような詩の中にうたっている。

ボストンの冬の雪どけ道について

彼女は頭布ツバを斜にのせて

白い髪は乱れ

雪と氷の中を人々に説いてまわる

彼女の姿は教育の旗幟だ

一九九四年の正月の或る日、エリザベスは外出先から帰ると急に疲れを覚えて床に横たわった。外には電車の通る音が聞えていた。恐らく、エリザベスの親しくしていた人達は、電車の音をきかずして、先立ったであろう。エリザベス・ビーボディは十九世紀のアメリカの文化を生き抜いた。そして、幼稚園運動は、彼女の生涯の最後の、そして最大の努力だったのである。